

# 美術科学習指導案

日 時 平成28年6月2日(木) 公開授業Ⅱ  
学 級 岩手大学教育学部附属中学校  
2年C組39名  
会 場 美術室  
授業者 高橋知志

## 1 題材名 B鑑賞：「絵手紙を味わう」

## 2 題材について

### (1) 生徒観

昨年度の写生会では木を主題にして水彩画を制作した。狙いとしては「木の〇〇を表現」ということで、実景の樹木から感じ取ったことをもとに「〇〇」に入る言葉を自分で決めてテーマとしたものである。しかし、プリントには自分のテーマを記入しているものの、実際の制作では参考資料として与えられた実景写真の再現に向かって行ったり、校舎内に掲示している先輩の作品に影響を受け、その模倣に走ってしまった生徒が少なくなかったと感じている。

これは、「主題を表現」するということがどのような工夫、あるいはどのような感覚のもとで行われるべきことなのか、具体的なイメージを持っていないまま制作していたからなのではないかと考察した。生徒が絵に表現しようとした「木のあたたかさ」「やさしさ」「生命力」「息吹」などの感情要素は、その木を「自分の目で見て心で感じたこと」である。そしてそれらは「形としては不可視なこと」である以上、作者がその木のどんな様子(どんな部分)からそれを感じたのか、大事なところを強調して描く工夫をしなければ、鑑賞者に自分の感動を伝えることができない。

また、色彩の学習では、色の持つ感情要素等の〔共通事項〕を学習し、「自分の夢」というテーマでレタリングの制作も行った。この制作では、自分で調合した色に自分の表現テーマと結びつけた色名を付けることで、作品に意味付けをさせた。制作後の振り返りの記述を見ると、生徒たちはこの題材を通して、色・形と主題性についての関係にある程度理解できたと感じている。

今年度の写生会は共通テーマを「春の空気を感じて描く」とした。空気感を出すためには遠近の表現をしっかり追求することも大事であることから、透視図法の学習を事前に行った。しかしながら、実景から感じた空気感や表現したい雰囲気は、説明的な遠近の描写でリアルさを追求していくだけでは表現できない。教室での制作では実景の参考写真を使うことを避けて通ることはできないが、写真に写っている画像は正確な透視図法による形である。このことから、せっかく表現したいと思っている表現主題がおろそかになり、昨年度以上に制作が「写真画像の模写」に偏っていくことが懸念された。

前述のように、主題表現については昨年度から段階的に学習しているが、「理屈ではわかっているが実際の制作に反映されていない」課題を解消していく必要があると感じた。そこで、制作の中途であるが本題材を設定したものである。

## (2) 教材観

今回鑑賞するのは「絵手紙」である。その作品は、作者のおもいが端的に表現されており、四季折々の風物に感性をはたらかせて、感じたことを率直に絵と短文で構成しているものが多い。また、その名の通り、これはあくまでも手紙であるというのが前提であるということだ。つまり、受け取る相手が存在する。作品を見てみると、確かに親・兄弟・友人などに宛てた作品が多いが、中にはどうやら“自分自身に宛てた”とみられる作品もある。このことから、絵手紙は単なる通信メディアではなく、作者の心情が強く表現された主題性の高い表現ジャンルであるということが言えるのではないかと考えた。そしてこのことから、今回の鑑賞を通して、対象から感じた「目に見えない感情要素（自分自身の心）」を作品に表現していくことについて考える機会になるのではないかと考えた。この活動が現在進めている風景画の制作で「主題を意識した表現活動」につながっていくことを期待している。

ちなみに、昨年度までは3年生の最後の題材として、「卒業を直前に控えた自分のおもいを、お世話になった大事な人に伝えよう」という主題で制作させている。この制作に先立って何点かの絵手紙を鑑賞したが、3年生では主に自己の内面を題材にした絵手紙の表現を中心に味わわせている。今回2年生では「対象からの感受をもとに発想する」ことを大事にした鑑賞をさせていきたい。また、絵手紙の特徴である制作の簡便さや自由さにも注目させ、決して敷居の高い制作活動ではないのだということにも気づかせたい。結果として生徒が絵手紙表現に興味を抱き、自分でも描いてみたいという気持ちを自身の生活の中で実現させていくことができればよいとも考えている。

鑑賞で扱う作品は著名な作家のものを避け、できる限り一般人の手によるものを選びたい。また、過去の本校生徒による作品も混ぜて、複数提示したい。手軽さや身近さを感じさせることを考えてのことであるが、実際秀逸な作品が多数存在する。この絵手紙の鑑賞が、生徒の美術に対する興味関心を高めていく契機になることを望んでいる。

## (3) 学びの本質に迫る指導について

本校美術科では、研究主題を「豊かに表し、豊かにかかわる生徒の育成」としている。表現も鑑賞も、基本的に「色と形」についての感覚や意識、知識や理解を土台として行われる。美術科ではこれを「造形言語」と称し、いわゆる〔共通事項〕として学習活動の中で重要視してきた。ただ、“豊かに”という点について考えると、机上で得た知識だけで目指す姿に迫っていくことはできない。表現も鑑賞も、その体験を様々に重ね蓄積していくことが必要である。何よりも能動的な姿勢抜きには深まりを望むべくもない。主体的に表現（鑑賞）活動を重ねていく中で、主題表現を通して自己理解を深めたり他者との相違を認識したりすることで、自分なりの造形感覚が磨かれていくのではないだろうか。そのようなことを基本として考えた研究主題をもとに、学びの本質に迫っていくために、次の4点について高めていくことを重点項目に据えた実践をしてきた。

- ① 自己理解を深め、主体的に自分らしさを追い求める姿勢
- ② 能動的に自分の表現活動をデザインしたり、表現上の課題点を自己解決したりしていく力
- ③ 他者の考えを受容し、他者の表現から様々なことを感じ取る力
- ④ 美的感覚を働かせて、自分の生活を豊かにしていく態度

具体的な手立てとしては、制作の主題を大事にし、主題を表現することについて意識を高める指導の工夫（①②）、表現領域の学習との関連性を持たせた指導の工夫（②）、美術の学習体験を自らの生活に取り入れて豊かにしていこうという態度の涵養（②④）、自他の相違を自覚し、自己理解をより深めていく言語活動（③）ということについて、本時の指導で具体的に構想したい。

### 3 題材の指導目標及び評価規準

#### (1) 指導目標

作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを理解し見方を深めさせる。

絵手紙作品に対し、自分の価値意識をもって批評し合い、よさや美しさを幅広く味わわせる。

#### (2) 評価規準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
絵手紙作品の鑑賞に親しみ、色や形などの特徴から、表現の良さや作者の表現の工夫などに関心を持ち、主体的に感じ取ろうとしている。	感性や想像力を働かせ、表現のよさや美しさ、作者の心情、創造力の豊かさなどを感じ取って深く味わったり、自分の価値意識をもって批評しあうことを通して、見方を深めることができる。

### 4 本時について

#### (1) 指導の構想

本時の鑑賞では、絵手紙制作を趣味としている一般の方々が公開している作品を中心に取り上げたい。また、昨年度までの生徒による作品もおりませ、10点程度の作品の原寸複製を用意してグループに配付する。グループでの話し合いについては、「どんなものが描かれているか」「どんな画材で描かれているか」「作者は何を表現したかったのだろうか」「どんな人がどんな人に伝えようとしたのだろうか」「その他気づいたことはないか」といった観点を与え、これらをもとにしながら自由に討論させたい。実際、作品は作者によって多様な画材が用いられている。表現されているモチーフや主題もまったく自由である。また、作品は著名な作家の作品ではなく一般の人の手による作品であることや、本校の先輩の作品もあることなどから、身近な材料で自由に手軽に親しむことができるものであることにも気づかせたい。そればかりでなく、中には作者の価値観や人生観といった内面が表現されていることにも気づくことができれば、生徒自身の表現活動に何らかのヒントとなるであろう。

授業に先立つ写生会当日に、画用紙とは別にプリント資料を用意して「描こうとしている構図の中で自分が最も春を感じた“部分”をスケッチ」させている。今回は、授業の最後に生徒にはがき用紙を配付し、当日のミニスケッチをもとに自分で絵手紙を作成して美術室のポストに投函することを課題として与えてみたい。それをもって本時の学習の評価材とすることもできると考えている。

授業は生徒と教師の対話だけでなく生徒同士の対話も大事に考え、4人グループでの学習を基本として進めていく。生徒にとって絵手紙は「なんとなく見たことはある」程度の認識であると予想することから、導入段階で絵手紙という表現ジャンルについての簡単に共通理解を図りたい。また、本校美術科で実践してきた対話型の鑑賞授業の取り組みを生かし、課題追究は「広げる・深める」「まとめて個に返す」流れを大事にして展開したい。

